

天天中文シリーズ講座：中国語でキャリアアップ！

「中国語でキャリアアップ！」は中国でキャリアを発展させる各界の方々に、仕事の現場や中国語学習法についてお話を伺う「天天中文」のシリーズ講座。中国の各界で活躍する皆さんに、仕事や生活のリアル体験をお伺いします！

第2回（2021年10月29日）

ゲスト：KEIZO さん/栗野敬三（あわの けいぞう）さん

（略歴）

サウンドプロデューサー、レコーディングエンジニア。

JVC ビクタースタジオに入社後、Mr.Children、LUNA SEA、YMO、THE STAR CLUB、筋肉少女帯、SMAP、高橋真梨子、大貫妙子、鬼太鼓座等数多くのレコーディングに参加。1997年、香港返還記念アルバムの制作で中国のバンド「輪回」のレコーディングに参加したことをきっかけに、多くの中国アーティストのアルバムレコーディングに参加。1999年には北京に拠点を移し、本格的に中国での活動を開始。

<お話の流れ>

出張初日から中国にはまる/中国の熱いミュージシャン/音楽のチャイナドリーム/中国から日本への発注が増加/著作権意識の移り変わり/海外が注目、中国のエスニック音楽

出張初日から中国にはまる

天天中文：では、KEIZO さん、自己紹介をお願いします。

KEIZO：はい、今日はよろしくお願いします。中国にきてから22年になります。日本にいたときにJVC ビクターでレコーディングエンジニアをしていたんですが、1997年、当時、ビクターは中国のアーティストと契約したレーベルを持っていて、そのために出張で北京に来ました。ちょうど、北京で香港返還のイベントがありまして、原口さんご夫婦にお会いしましたよね。記念バレードがありまして、そのバレードが見られる大通りに面した貴賓楼ホテルのベランダでお会いして、それ以来20年来おつきあいいただいて。今日はありがとうございます。うまく話せないかもしれませんが（笑）。

天天中文：KEIZO さんは、それ以来、大活躍ですね。90年代は日本と中国の音楽業界もまだまだ差があって、そんななか、中国のたくさんの方々をサポートしてきていると思い

ますが、今は具体的にはどんなことをしていますか？私実はレコードエンジニアとかサウンドプロデューサーといった仕事がよくわからないので具体的に教えていただけますか？

KEIZO:音全般に関わる部分なんですけど、具体的にいきますと、アーティストがきて、マイクを立てて歌を歌ってもらって録音します。そしてギターとかドラムなど、他の楽器もそれぞれ録音して、録音したものを最後にまとめあげてみなさんが聴いているものに仕上げる、という仕事ですね。僕が来たころの中国はロックブームだったのですが、まだ当時はそのように作れる人材がいなかったのと、対応できるスタジオも少なかったので、すごく重宝されました。それでもう来た瞬間に中国にはまってしまったんです。

天天中文：どういうところにはまったのでしょうか？

KEIZO：いっぱいあるんですけど（笑）。まず中華料理。来た初日に「火鍋」を食べたのを強烈に覚えているんですけど、真っ赤な鍋で味も見た目もインパクトがあって、それから「白酒」というお酒を飲んで。中国語は一言もしゃべれなかったんですけど、迎えてくれた中国のミュージシャンがとても熱くて、わーって、乾杯してくれて、飲んで。

「BEATLES！」とかミュージシャンの名前って乾杯！とか最初はそれだけだったんですけど、とても楽しくて。来る前はあまり情報もなくってちょっと不安な感じだったんですが、会社の出張で行ってこい、ということになりました。その時、会社の先輩には「お前は中国にあってるから」と言われたのを覚えています、まさに来た初日にはまっていまして。

中国の熱いミュージシャン

天天中文：中国での仕事はどんなふうに進み始めたんですが？

KEIZO:97年に最初に来て99年に住み始めるまで会社の出張で何度か来ていたんですが、来ているうちに、当時は日本人がきて中国ロックに関わっているというのも珍しかったので「こんな奴が来てるよ」という話が広がって、いろんなところから声がかかったんですね。

「どうしたら KEIZO と仕事できるんだ？」という感じで。その時の僕は中国語は全然できなかったのですが、ビクターの通訳の方がついてくれて、今、その方は中国の音楽業界でものすごく偉い大先生になっています。それで「来てくれ、来てくれ」といわれて会社からの仕事と同時にちょこちょこアルバイトしていたのが始まりです。求められると、楽しいですよ。その当時は、機材も日本と中国はだいぶ差があったのですが、何よりも中国のミュージシャンが熱くて「何か作りたい！」という気持ちがあって、それは自分もワクワクしますよね。

天天中文：それはわかりますね。私も昔は商社にいて、中国の人って、すごくストレートに

自分のやりたいことを言ってきますよね。それで資金があるのかというなくて、でも「自分はこういうことをやりたいんだ」という気持ちが根拠になっていて。それは我儘に聞こえることもあるんですが、でもそのやりとりは楽しいですよ。

KEIZO：そうですね。日本の仕事もとても楽しかったんですけど、日本だと立ち位置を考えたりしますよね。「自分はエンジニアだからここまでは言っているけど、これ以上は言っちゃいけないかな」と例えばそんなことも考えたりしますよね。それが普通だったんですけど、中国にきて、入ったばかりの若い子でもアイデアをガンガン言ってきたり、気持ちがいいなあ、と。それでこちらも何か言わなくちゃいけないな、と思ったり。

天天中文：全体に活躍している人が若くて、アクティブで物事が動いている感じがしますよね。

KEIZO：そうですね。僕は今年 50 歳なんですけど、中国だと先生とかまとめる位置になっていて、まだ現場にいるの？という感じです。

音楽のチャイナドリーム

天天中文：それにしても、日本の大手の会社から中国に来る、というのはすごい決断ですね。それは日本ではこのくらいのポジションまでしかいけないけど、中国のほうが自分の名前で活躍できる、というような考えもあったのですか？

KEIZO：それがそういうことは一切考えてなくて。若かったんだと思いますね。今だったらもっといろいろ考えて行動しますけど。当時 20 代後半だったので勢いですね。まあ、ダメだったらまた日本に帰って仕事もあるだろう、というものもあったので。しかも別に会社と喧嘩別れしたわけではないので、離れてからも、今もまたビクターの仕事をしたり、応援してもらったりもしています。また逆にこちらから仕事をお願いしたりすることもありました。とにかく当時はなにも考えてなくて、今同じことをやれ、といわれたらちょっと無理ですけど（笑）。

天天中文：中国の音楽産業の発展の仕方はどうなんですか？ひと昔前の日本の「スター誕生」のようなテレビ番組のコンテストも盛んですよ。

KEIZO：ちょうどタイムリーな話題なのですが、あれがヒートアップしすぎというので中国ではコンテスト形式の番組が最近、中止になりました。節目というか、音楽界をよりよくしていくための引き締めとかと思います。

天天中文：KEIZOさんは、こうして20年以上、中国の音楽業界を見ているわけですが、具体的にいうと、どんなアーティストの仕事に参加しているのですか？

KEIZO：最初来た頃はバンドブームで、「黒豹」とか「唐朝」という中国のロックバンドですね。今もみなさん活動していますけど。それこそ歌合戦番組から出た人で劉軍さんなどいますし、もう本当にたくさんいて、記録もとっていないので……。そうですね、最初のころで思い出すのは、陳坤さんという歌手がいて、彼は出会った時は、ある歌手の男友達でバックコーラスの一人としてスタジオに来たんですよ。そのころ、彼はライブハウスやバーで歌ったりして生計をたてていたんですが、それが「無所謂」という1曲ヒットして大スターになりまして。そういうシンデレラボーイみたいな話が本当にいっぱいありますね。

天天中文：日本の芸能界は浮き沈みが激しいですが、中国ではそういう歌手の人たちは生涯をどのように過ごしていくんですか？日本では1曲あたってそのあとずっとその曲で食べている歌手もいたりしますか？

KEIZO：そうですね。中国でも1曲あたると、まだ生涯暮らしていけますね。出演料が日本とはまったく桁が違うので。それと例えば「抖音」などの携帯プラットフォームで1日300万人とかが聴く曲があるんですが、1年間で600万元くらい入るわけなので。しかもそういう曲が自宅で録音したようなものもあるんです。スタジオで作ったちゃんとしたものもあるんですけど、それこそ携帯で作ったような曲がヒットする傾向がある。それは日本でも韓国でも似ているかもしれませんが。チャイナドリームですね。

中国から日本への発注が増加

天天中文：話題は変わりますが中国のヒット曲は日本のヒット曲をカバーしたものが多いですね？中国でそれを聴くと懐かしいな、と思うのですが、中国の人にも同じように心に響いているのでしょうか？

KEIZO：そうですね、最近はヒップホップなども主流でありますしいろんな音楽がありますが、特に僕が来た頃は特に、歌がしっかりと前に出ている曲、メロディがしっかりしたものが好まれて日本の歌がよくカバーされていましたね。そういう曲は今でも時代を超えて知ってる人が多いですし、カラオケでも今も歌われていますよね。千昌夫の「北国の春」はほんとによく知られていて、レストランなどでも日本人が来た、というと急にその曲がかかったり、飲み会でなにか日本の歌を歌え、といわれて伴奏も何もないところで歌わされたり。でもすごく盛り上がりますよね。

天天中文：KEIZO さんはミュージシャンだったことはないんですか？

KEIZO:高校の時にバンドをやっていたのがきっかけで、それでこの仕事をしたいと思うようになりました。

天天中文：今のお仕事で一番苦労していることはなんでしょう？苦労も多いでしょう？

KEIZO:苦労ですか……。何でしょうね。意外とふだんの仕事って地味なんですよ。最後のまとめの作業というのは、今は自宅にこもってコンピュータで黙々とやっていて、できあがったら wechat にあげて聴いてもらって。出来たら wechat に送金されてくるとか。いまはプロジェクトごとに wechat でグループを立ち上げて、レコーディングは各自が自分たちが進めてそこにアップして、僕は最後のまとめをすることが多いです。技術の進歩のおかげで今は wechat にデータを送ってもらって僕が最後のまとめをする形で地方のバンドの仕事などもできるようになりました。

最近の仕事として、中国のアーティストに、日本のミュージシャンに参加してもらうこともあるんですね。その場合は僕が間に入って、自宅で録音してもらったデータを送ってもらいます。基本的に日中間でやり取りする人には wechat を装着してもらうようにしています。

中国の会社が日本に音楽制作を発注する形もここ三年ほど増えています。一番多いのは、映画の音楽で、映画のこの部分を日本のミュージシャンに頼みたいとか、あるいは声優さんに中国の映画の主題歌を歌って欲しい、など声優さんのリクエストもとても多いです。

天天中文：逆のパターンはありますか？

KEIZO：中国のほうがお金も、制作力もありますし、積極的なんですよ。特にアニメ系はものすごく知名度があります。最近のアニメの人は僕もわからないこともあるんですが、中国の人のほうが詳しいです。

天天中文：そういえば今年は北京で「宮崎駿とジブリ展」があって、会場がちょうど我が家の近所でしたが連日、凄い行列でしたね。

***天天中文の会員からの Q&A

著作権意識の移り変わり

会員：KEIZO さんにとってもっとも印象深かったミュージシャンは誰でしょうか？また二つ目の質問、日本では CD などミュージシャンの著作権がよく保護されていますが、携帯アプリでの視聴が中心の中国では著作権保護どんな状態でしょうか？

KEIZO：まず一ミュージシャン、一人だけ挙げるのはすごく難しいんですけど、今パッと浮かぶ方が何人かいて、一人は劉歆さん。北京オリンピックでも歌いましたけど、国民的歌手ですよ。学校の先生もしています。中国の歌手って、特に昔の歌手はうまい人はもう、めっちゃくちゃにうまいですよ。ふつう、録音のときは最初から最後までパーッと録るのではなく、1フレーズずつ、下手すると1文字ずつ直しながら録音することもあるのですが、劉歆さんは、1回パーッと歌って、しかも自分で全部、どこをどう間違えたかわかっているんですよ。そして2回目に全部修正して一瞬で仕事が終わる。スーパー歌手ですね。

二つ目のご質問、著作権については、確かに中国は長いこと著作権の問題がありました。ただ中国の音楽がちゃんと産業化された2010年代以降、しかも配信が始まった今となつては、ものすごくきちんと、細かく管理されているんですよ。配信に関しては確実にビジネスが成り立っていて、海賊版みたいなものはないですね。なので日本の大手のレコード会社も、ほとんどが中国の「QQ音楽」などの配信プラットフォームと契約してきちんとしたビジネスを行っています。

海外が注目、中国エスニック音楽

会員：日本政府のクールジャパンの施策により、日本のアニメやゲームが世界に出て行って人気を呼んでいます。中国もゲームが世界的に人気ですよ。音楽の世界進出はいかがですか？

KEIZO：最近是中国の現代アートが日本でも紹介されていますし、ゲームはもう世界的に人気ですよ。日本とはくらべものにならないくらいの圧倒的な力の入れ方も関わっていると思います。音楽はですね、ポップスでいうと、まだ世界的というより中国国内ですが、ちょっと変わったところだと民族楽器を使った、内モンゴルのモンゴル族のハードロックで日本のフェスに出たり、アメリカで録音したりしている人がいます。海外の一部で凄く人気があります。あとやはり少数民族ではいろんな方がいるんですけど、現代の楽器やリズムを混ぜたワールドミュージックに近い音楽でしょうか。そういう人たちは中国よりも海外での人気のほうが高かったりします。これから欧米経由で中国で流行るかもしれませんね。

会員：KEIZO さんの普段のお仕事のコミュニケーションについて知りたいです。やりとりは何語でどんなふうにとっていらっしゃいますか？

KEIZO：

共通語は中国語です。出張できた時は通訳の人がいましたが、そのころ鍛えられた感じですかね。僕は中国語を勉強したことないんですけど、長くいるのでなんとなくそのなかで。音楽用語だと詳しいかもしれないですけど、それ以外だとボロボロかもしれません。あと、音楽は割と感覚的につながれますよね、リズムとかメロディとか、顔をみて「今、よかったね！」とか。歌詞はまたすごく難しくなりますけど、音は聴いた瞬間に何も言わなくても分かる、そこは世界共通なのかなあ、というのがありますね。

この後、会員からの質問が続き、中国音楽や中国事情をめぐる会話が続きました。

文・JEIS